

## 音楽教育とハイテク

Music Education and High-technology

鈴木 寛 (兵庫教育大学名誉教授)

## 評価とハイテク (9)

## 通知簿は正しいか

神戸市の小学生の保護者に配られる「あゆみ」という通知簿は勿論絶対評価ですが、次の4項目について「よくできる」「できる」「もう少し」などの3段階の評価がなされています。

- ① 進んで音楽活動を行い生活に生かそうとする。
- ② 音楽の美しさや変化を感じとって自分らしい表現を工夫している。
- ③ 律旋を生かして表現する。
- ④ 音楽を聴いてそのよさや美しさを感じ取る。

①は【態度・意欲】のようですが学校生活における音楽活動の熱心さで評価をしているようです。評価の方法は教師の【観察】と【印象】を基にするしか方法はありません。「生活に生かそうとする」という項目は「音楽活動に不熱心」の反対の行動ですから熱心かそうでないかでこの評価項目は評価されているようです。②の「音楽の美しさや変化を感じ取って自分らしい表現を工夫している」は学習指導要領の文言と似ていますが同じ表現は学習指導要領には見あたりませんからオリジナルであることはわかります。しかし、これも「音楽の美しさや変化を感じ取ったかどうか」という評価は至難の技であることがうかがい知れます。アンケート法と観察法が中心になりますが、感想文を利用する方法では【文章能力】というバイヤスのかかったものを使うわけですから正しい評価にはほど遠いものだと思います。強いて褒めるなら「自分らしい表現を工夫している」という実態の見えそうな客観性の高い表現があることです。これは【実技テスト】で評価出来るから信頼度が高いと言えます。③も同じ理由で評価出来ますが、【旋律】という音楽のほんの一側面だけを観るとするのは荒っぽ過ぎると思うのですが・・・旋律を生かすためにはフレージング、アクセント、強弱、音色など数々の要素が必要で、それらの要素をどう駆使して表現するのかを審査員のように個々の演奏を審査する(できる)システムは小学校には無いように思うのですが・・・④に至ってはもし通知簿で「よくできる」とか「もう少し」と評価されたら、あの先生いったいどうしてそんなことがわかるの?と思いますよね。「群盲象を語る」という諺のように子どもの一部の能力をバラバラに評価しているような印象があります。子どもの全体像を表現するには通知簿のページ数ではとても書き尽くせませんからこうなったのですが、例えば1学期は④の項目が「よくできる」だったのが2学期に「もう少し」となるような場合、保護者には何をどうすれば3学期に挽回できるのかさっぱりわからないでしょう

病名と検査結果だけを知らされても、なぜそうなったのかとかどうすれば改善されるか等の処方が必要なければ病院は無意味なように、このような通知簿は幸せな家庭を破壊する効果しかありません。

それなら一体どんな通知簿だったら納得出来るのでしょうか。

- ①正しい音程で歌える
- ②正しく楽器の演奏が出来る
- ③音楽の特徴を説明出来る
- ④リズムが正しく表現できる
- ⑤自分なりの表現を工夫する

ほんの思いつきですが、こんな感じだったら評価する側も、受け取る側もわかりやすいと思うのですが、ここで敢えて「美しい」とか「良い」とか言う【形容詞】を排除することで客観性が高まり評価もしやすくなるのです。

私たちが研究論文を書くとき主語【私】を使えないのと文中のキーワードに【形容詞】が使えないのと同じです。「よくできる」の「よく」は形容動詞(英語では副詞)ですが非常に表現を曖昧にしてしまうことにお気づきでしょう。大阪商人の「ぼちぼちでんなあ」みたいな感じになってしまいましたが、もし通知簿に「ぼちぼちでんなあ」と書かれたら関東人ならマイナスイメージに捉えもって頑張らなくっちゃと思うでしょうが、関西では結構良い線いっている感じに受け止められるのも面白いかも知れません。さらに工夫が必要なのは「感じる」「思う」等の内面的精神活動のうち特に【情動】に関する評価は難しいよ言うことです。情動というのは気分というのと紙一重で外観からは見えないものです。しかし、学習指導要領にある「味わう」「感じとる」「親しむ」等の目標はすべて情動の結果であり、従って客観的な評価は大変難しいと思われて評価項目から外されてきました。その結果入試科目からもその客観的評価の難しさから外され「不要教科」へと凋落したのです。【価値観】や【美意識】に左右される人間の情動こそが音楽に対する感動や憧れを生み、人間らしい情操を育む一助となっているという意味で「音楽科無用論」を唱える為政者に何とか知って欲しい音楽の一面です。

しかし、長年正しい評価をすることに目をつぶってきた結果、正しい指導をすることも揺らいできた現実を教師や音楽教育関係者が身をもって償わない限り、学校音楽はエンターテインメントの学校版から脱することもできずその学習内容だけでなく音楽教師までもが一段低く見られることに甘んじてゆかねばなりません。自信をもってつけられる通知簿こそが自信をもって指導できる教師の支えとなるのです。